

富山大学における自殺防止対策システムの構築と活動実績

富山大学自殺防止対策室

八島不二彦, 今井優子, 斎藤清二, 宮脇利男, 西川友之, 立浪勝, 松井祥子, 瀬尾友徳, 竹澤みどり,
酒井渉, 彦坂伸一, 野原美幸, 二上千恵子, 原澤さゆみ

Construction and Activities of Suicide Prevention System in Toyama University

Fujihiko Yashima, Yuko Imai, Seiji Saito, Toshio Miyawaki, Tomoyuki Nishikawa,
Masaru Tatinami, Shoko Matsui, Tomonori Seo, Midori Takezawa, Wataru Sakai,
Shinichi Hikosaka, Miyuki Nohara, Chieko Futagami, Sayumi Harasawa

キーワード：自殺防止対策, 学生なんでも相談窓口, 1次2次3次予防

1. 背景と目的

富山大学では平成20年度に4人, 平成21年度に3人の自殺が発生し, その対策として平成21年12月に富山大学自殺防止対策室が設置された。富山大学自殺防止対策室は自殺者ゼロを目標に掲げ, 約3年間さまざまな活動を行って来た。その結果, 自殺防止対策室が本格的に活動を始めた平成22年度から平成24年12月現在までの自殺者は2人に止まっている。自殺者の減少という結果は出ているが, 富山大学の自殺防止対策システムは本当に機能しているのか疑問が残る。

そこで本研究では, これまでの富山大学自殺防止対策室の活動実績を分析し, 富山大学における自殺防止対策システムが有効に機能しているかについて検討する。

自殺予防では1次2次3次予防という考え方が一般的に用いられるので, 本研究では1次2次3次予防の観点から実績を検討することにした。自殺の1次2次3次予防について河西(2009)は次のように定義している。

自殺の1次予防は, 心の健康を維持, 増進させるための地域の精神保健活動の推進, 自殺予防のための啓発活動を地域や職場・学校などのさまざまな領域で展開することである。2次予防は, 自

殺に傾いている人に早期に気づき, 自殺が起きないように積極的に関与(介入)し, 支援や治療を行うことである。2次予防には, 今, 目の前で起きる可能性のある自殺を何とか食い止めることも含まれる。3次予防は, 病気のリハビリテーションとは異なり, 不幸にも自殺が生じてしまった後の対応となる。この事後の対応には, 遺された人たち(自死遺族や周囲の人々)への支援やケア, 事後の自殺の連鎖や群発を防ぐための手立て, そして自殺の経緯を詳細に調べて自殺行動の理解と予防に活用すること(心理的剖検)が含まれる。(2009, 河西)

2. 体制の構築

自殺防止対策室発足時(平成21年12月)に以下の活動方針が決定された。

「危険な学生への接触を密に救いを求める叫びをキャッチ」－教職員の意識改革－

◇「学生なんでも相談員」の配置

五福, 杉谷, 高岡の3キャンパス

◇自殺者の背景収集, 解析

学部, 出身地, クラブ入部の有無, 性別等

◇入学時オリエンテーションで自殺予防について講義

◇自殺防止対策FD研修会の開催

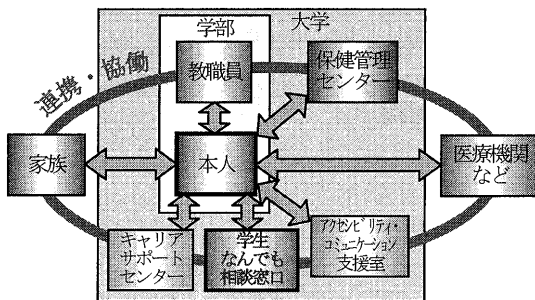
- ・学内講師による各学部FD研修会を行う。
- ・外部講師を招き、全学的な研修会を行う。

平成22年4月から3キャンパスの学生なんでも相談窓口に精神保健福祉士、心理士、特別支援学校教諭、看護師などの専門職能を有するコーディネーターを配置(五福キャンパス：40hr／週1名、30hr／週1名、杉谷キャンパス：18hr／週1名、高岡キャンパス：30hr／週1名)し、業務内容を以下の5つとした。

- ◇今まで事務職員が兼務していた「学生なんでも相談窓口」業務をそのまま行い、手続きの質問から悩み相談まで幅広く受ける。
- ◇面談だけでなく、メールや電話の質問・相談も受ける。
- ◇相談に来ている学生の守秘義務を守りながら、同意を得て教職員や保護者、他専門機関との連携をし、包括的サポートを図る。
- ◇学生本人からの相談を受けると共に、保護者や教職員からの学生に関する相談も受け、総合的なサポート役をする。
- ◇状況によって、出前相談や自宅訪問、学内外専門機関への同行をする。

学生なんでも相談窓口の連携イメージを図1に示す。

図1 連携イメージ



また学生なんでも相談窓口の自殺防止対策を以下の業務とした。

①1次予防（プリベンション）

- ◇「学生なんでも相談窓口」に来る学生の自殺

リスクを探りながら、表面上ではない本質的な課題・悩みを聴いて対応する。

- ◇相談に来た学生のリスクが高くなる前に、相談を聴きながら、相談内容に応じてうつ病の危険や予防の知識を提供する。

②2次予防（インターベンション）

- ◇教職員等からのハイリスク学生の連絡を受けて、面談や他専門機関へのつなぎ・同行をし、サポート体制の連携推進をする。

- ◇連絡が取れない場合や大学に来ていない場合は、教職員や保護者と連携を取り、状況によっては自宅へ訪問をし、安全の確認や面談を行う。

③3次予防（ポストベンション）

- ◇自殺既遂者の発見者や周囲の関係者、家族などへの面談（グリーフ・ケア）を行い、自殺の連鎖や健康の悪化防止をする。

- ◇自殺既遂直後、関係する教職員や他専門機関と打ち合わせし、周囲の学生に対して伝える内容と範囲を検討・実施し、周囲に与える影響を最小限にする。

3. 活動実績

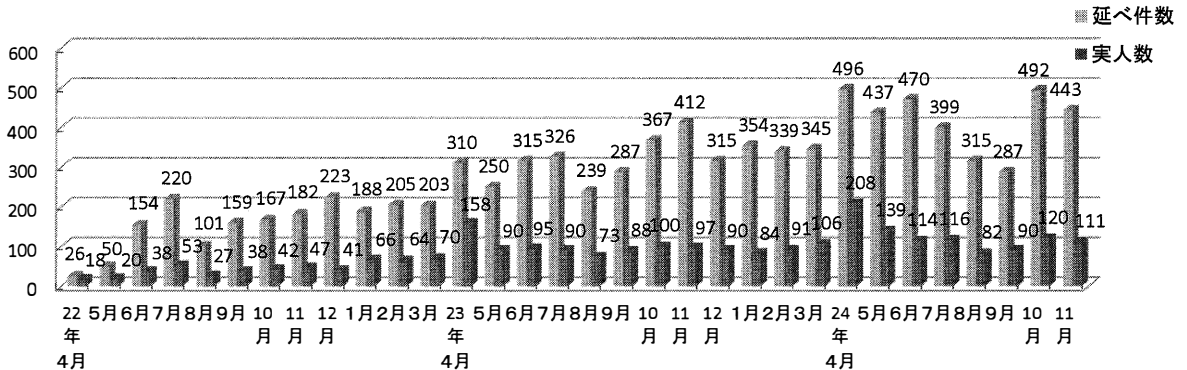
①1次予防（プリベンション）

学生や教職員向け研修会による啓発活動と学生なんでも相談窓口による活動を以下の通り行った。

- ◇毎年度新入生オリエンテーション時に自殺予防講義を行った。
- ◇学内講師による各学部教授会等でのFD研修会を初年度開催し、次年度からは新任教員向けFD研修会を開催した。
- ◇毎年度学外講師による全学的なFD研修会を開催した。
- ◇学生なんでも相談窓口相談業務

学生なんでも相談窓口の活動が全て自殺防止対策の1次予防をしている訳ではないが、相談の増加そのものが個別の1次予防の機会を広げると考えられる。学生なんでも相談窓口の相談件数は、平成22年度延べ件数1,878件、実人数215人、平成23年度延べ件数3,859

図2 月別相談件数



件、実人数503人、平成24年度（4～11月）延べ件数3,339件、実人数495人であった。月別、内容別、支援方法別、危険度別の件数を以下に示す。

・月別件数（図2）

学生なんでも相談窓口で相談を受けた件数または支援をした件数を、延べ件数、実人数の2種類の数値で表示する。

・内容別延べ件数（図3～5）

相談・支援内容を10項目に分けて年度別に表示する。

図4 内容別延べ件数（平成23年度）

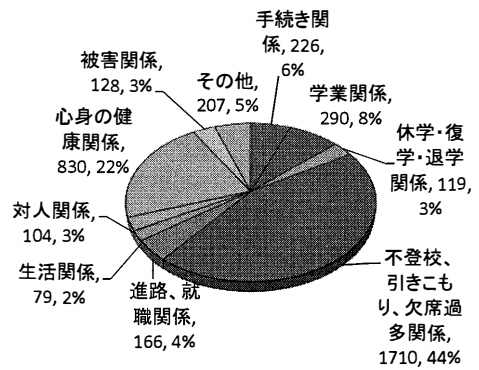


図3 内容別延べ件数（平成22年度）

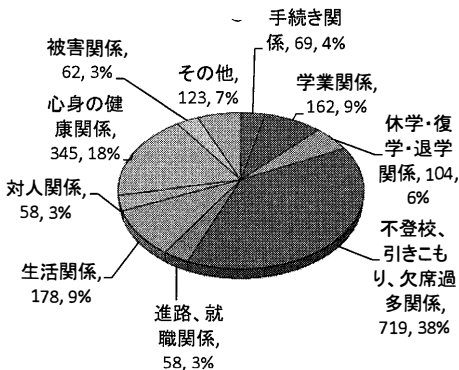
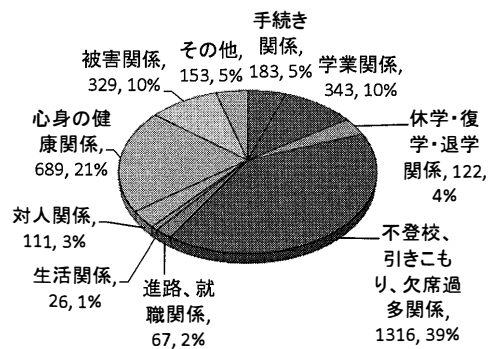


図5 内容別延べ件数（平成24年4～11月）



・支援方法別延べ件数（図6～8）

支援方法を、電話、メール、来談の相談と訪問・同行、連絡・調整等の5つに分けて年度別に表示する。

図6 支援方法別延べ件数
(平成22年度)

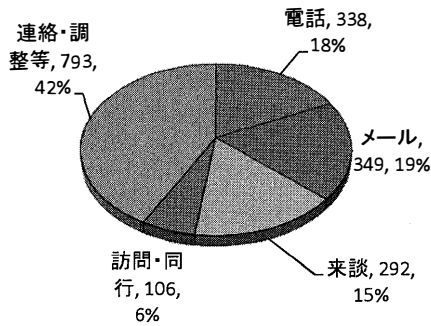


図7 支援方法別延べ件数
(平成23年度)

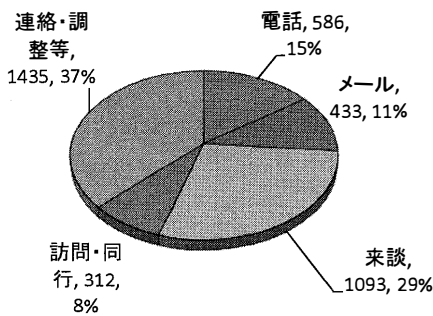
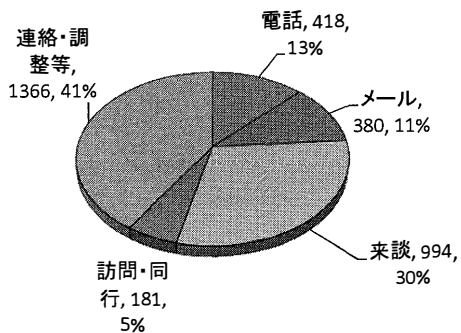


図8 支援方法別延べ件数
(平成24年4～11月)



・危険度別件数（図9～11）

学生なんでも相談窓口では自殺に対するリスクを3つに分けており、危険度Aは自殺関連行動があるケース、危険度Cは手続き関係の質問・問い合わせ、危険度BはA、C以外としている。自殺関連行動とは自殺企図（既遂、未遂）、自殺念慮、自傷行為を意味する。

図9 危険度別件数
(平成22年度)

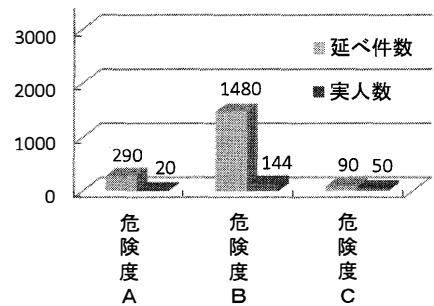


図10 危険度別件数
(平成23年度)

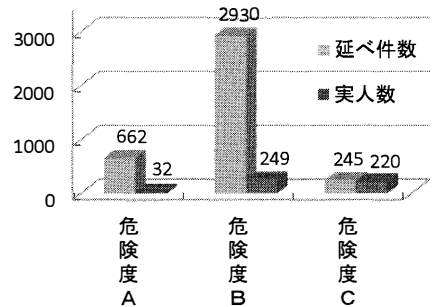


図11 危険度別件数
(平成24年度4～11月)

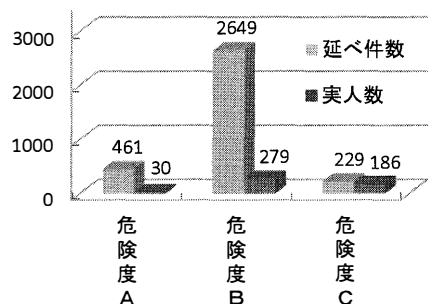


図12 ハイリスク（危険度A）学生への支援月別件数

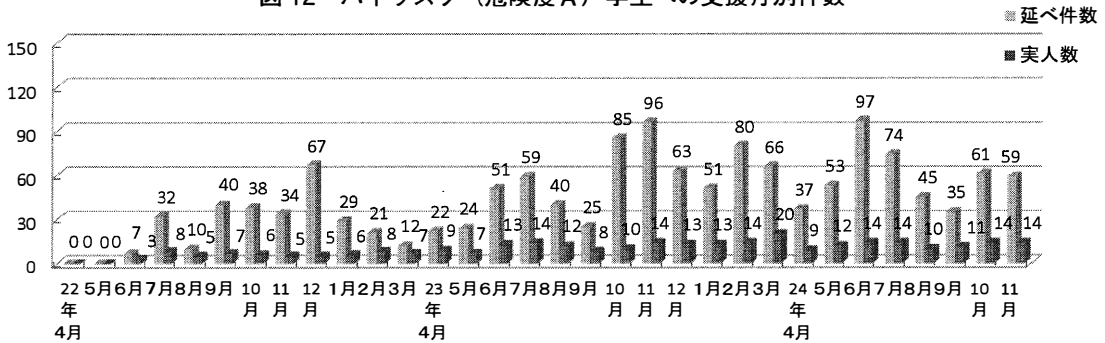
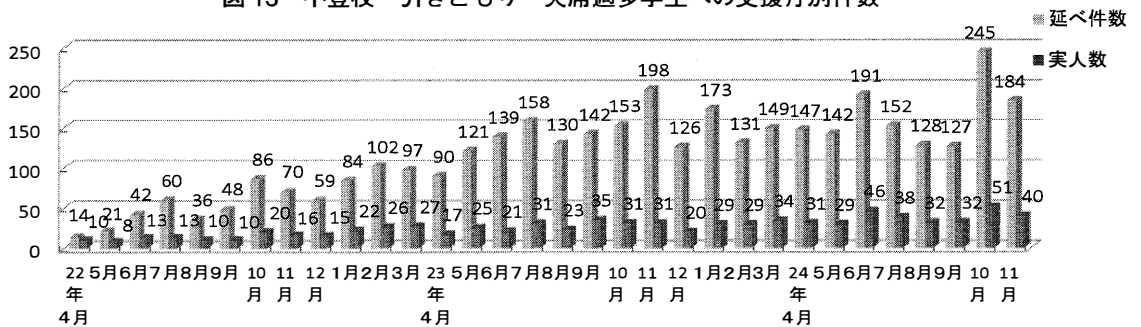


図13 不登校・引きこもり・欠席過多学生への支援月別件数



②2次予防（インターベンション）

学生なんでも相談窓口によるハイリスク学生への支援を行った。自殺関連行動がある危険度Aの学生をハイリスク学生と考え、学生なんでも相談窓口によるハイリスク学生への支援件数は、平成22年度延べ件数290件、実人数20人、平成23年度延べ件数662件、実人数32人、平成24年度（4～11月）延べ件数461件、実人数30人であった。月別件数は図12に示す。なお、これらのハイリスク学生の中からは、平成24年12月までの間に、自殺既遂に至った例はない。

③3次予防（ポストベンション）

学生なんでも相談窓口と自殺防止対策室員で平成21年度末の1件と平成23年度の2件に対するポストベンションを行った。行ったポストベンション件数は、平成22年度延べ件数18件、内グループ・ケア2件、平成23年度延べ件数22件、内グループ・ケア3件、平成24年度（4～11月）延べ件数0件であった。

④既遂者情報の分析

既遂者の情報分析を今後の予防に活用することはポストベンションに含まれる（2009, 河西）が、過去4年間についてまとめて行った情報分析の為、3次予防とは別項目とした。平成20年度から23年度4年間の既遂者9名の情報分析を行った結果、9人中6人は成績不振かつ欠席過多で、その内4人はここ1年間以上単位取得ゼロであった。そのことから不登校・引きこもり・欠席過多学生への支援が自殺防止対策に重要であると推察された。

そこで、自殺防止対策システムが有効に機能しているかについての評価項目として、自殺の1次2次3次予防に加えて不登校・引きこもり・欠席過多学生への支援内容を追加することにした。

学生なんでも相談窓口の不登校・引きこもり・欠席過多学生への支援件数は平成22年度延べ件数719件、実人数47人、平成23年度延べ件数1,710件、実人数83人、平成24年度（4～11月）延べ件数1,316件、実人数83人であった。月別件数は図13に示す。

4. 考察と結論

1次予防は、学生向けの新生オリエンテーションにおける自殺予防講義、教職員受けの各学部でのFD研修会と次年度からの新任教員研修会、大学全体向けの外部講師を招いての富山大学特別講演会を行っており、大学全体に渡って啓発活動の実績があった。また学生なんでも相談窓口において、平成22年度延べ1,878件、実人数215人、平成23年度延べ3,859件、実人数503人、平成24年度11月まで延べ3,339件、実人数495人の相談実績があり、その相談の中で個別のプレベンションが行われたと考えられる。

2次予防は、学生なんでも相談窓口において、平成22年度延べ290件、実人数20人、平成23年度延べ662件、実人数32人、平成24年度11月まで延べ461件、実人数30人のハイリスク学生への支援実績があり、2次予防の対象となったハイリスク学生から自殺既遂に至った例はなかった。

3次予防は、学生なんでも相談窓口と自殺防止対策室員において、平成22年4月から24年11月までポストベンション延べ40件、その内グリーン・ケア延べ5件の実績があった。

また平成20年度から23年度までの4年間の既遂者9名の調査・分析により導かれた不登校・引きこもり・欠席過多学生への支援の重要性に対して、学生なんでも相談窓口では平成22年度延べ719件、実人数47人、平成23年延べ1,710件、実人数83人、平成24年11月まで延べ1,316件、実人数83人の不登校・引きこもり・欠席過多学生への支援実績があった。

これらのことから、富山大学の自殺防止対策システムは1次から3次までの全ての予防と不登校・引きこもり・欠席過多学生への支援に実績があり、富山大学の自殺防止対策システムは有効に機能していると考えられる。

富山大学の自殺防止対策システムの有効性が確認出来たとはいえ、自殺防止対策室が本格的に稼働した平成22年度から平成24年12月現在まで2人の自殺既遂者を経験した。これらの自殺既遂者はいずれも2次予防の介入対象となっておらず、

よりいっそうの対策が求められる。平成20年度から23年度までの4年間の既遂者情報の分析の結果、9人中6人は成績不振かつ欠席過多で、その内4人はここ1年間に単位取得ゼロであったことが判明している。このことから、今後は富山大学の自殺防止対策システムをより有効に機能させる為、ハイリスク学生への周囲の気づきの強化が重要と思われる。

<文献>

河西千秋 (2009). 自殺予防学. 新潮社, pp.134-135.